神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Russia in France and "Nipponsky"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1998-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 天野, 和男, Amano, kazuo メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1694

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

フランスの中のロシアと「ニッポンスキー」

天　野　和　男

パリの日本大使館から歩いて十分余り，ピョートル大帝通りの東の突き当たりに聖アレクサンドル・ネフスキー東方教会がある。在外研究のためこの地に滞在した1990年は，ソビエト時代もその末期にあったためか，教会には嘗ての悲壮感はなかった。しかしやはりここは亡命ロシア人の心の拠り所であることに変わりはない。日曜日には教会の前庭や，向かいのロシア・レストランで和やかな雰囲気の中，老人たちの会話が弾んでいた。

「わたし達の中で，正真正銘のロシア魂を持っているのは誰かな？」―「それはな，このわたしだよ。」子供染みた無邪気な会話にも眼差は滑けいなほど真剣である。フランス語が突如ロシア語に代わるのはこのような時であった。異郷の地で生き抜いてきた老人たちの誇りと心意気の吐露である。この二つの言語が織りなすハーモニーは，トルストイの『戦争と平和』の世界に私たちを引き摺り込む。

ムッシュ・トロイにはこの教会で出会った。日本専門のロシア外交官であった父親と神戸に住んだこともある八十翁は「トロイツキー」（Тройцкий）を「トロイ」（Troy）と英国風の姓に改め，辛い時代をパリで耐えた。フランス人を母に持つこの老人にして，かくも「ロシア魂」に執着するのである。

秋の一日，ムッシュ・トロイにパリ郊外ナンジース飛行場に誘われた。耐用年数をとっくに過ぎたソ連製の車を百キロを超すスピードで田舎道をぶっ飛ばす。ロシア人の多くが亡命当初，糊口をしのぐ手段としたタクシー・ドライバーの腕前である。

一時間ほどで着いた飛行場の格納庫には老人所有の二機を含め十数機の小型機が並んでいた。ここで，図らずも二人乗超小型機の尾翼の取り換えを手伝うことになる。若いフランス人助手と三人で小一時間の，文字通りの手仕事であった。「よかったら，今からでもこれを飛ばしてみるが，一緒に乗らないか。」自転車の荷台にでも誘うに似た老人のことばに仰天する。この日は日曜日とあって自家用機が家族を乗せ，次から次へと舞いあがり，また舞い降りていた。

この時，警官が二人，音もなく近付いてきた。「わたしがロシア系で，あなたが東洋人だから怪しまれたのだよ。」老人は後でこう云って笑った。

この日，別れる時トロイ翁は大切にしているものをプレゼントしたいと私に差し出したのは，破れかけた古い革表紙の分厚い一冊であった。父親のトロイツキー氏が編纂し，1935年に旧満洲のハルビンで出版された露日辞典 Практический русско-ниппонский словарь であった。「ヤポンスキー(日本の)」ではなく「ニッポンスキー」とある。時代を感じさせる語法に，ある種の感慨をもつ。一人娘をアラブの地で失った孤独な老人はこの一冊の引き取り手を探していた。彼にとって，そして彼の父にとって，第三のふる里とも云える日本に，その落ち着き先を見つけ安堵した—と翁はロシア語で云った。

フランスはロシア革命後，多くの亡命者を受け入れてきた。作家イワン・ブーニンも1920年，五十才にしてこの国に逃れ，この国でロシア人初のノーベル文学賞受賞者となった。パリの国立スラブ研究所には1933年の受賞次定前の数ケ月の間に，彼が選考委員の一人，ルンド大学シグルド・アグレル教授と交わした六通の手紙のコピーが保存されている。自作品に対する自信と共に，経済的に不如意な亡命者の，賞に対する期待が，固くなに守られている旧正書法を通して，重苦しく感じとられる。

受賞決定の記事は新聞 Le Temps に載ったが，日常の出来事の欄の下の方に，〈Les prix Nobel〉の小さな見出しの，事実のみを紹介した五百字余

りの簡単なものであった。

文豪がその生涯を終えたアパートはパリ十六区ジャック・オッペンバッハ通りに容易に見つけることができたが，当然のことと思っていた著名人を顕彰するプレートは無かった。新聞の扱いから思えば，この方がむしろ当然であり，驚くに価しないことであるのかも知れない。

作家の永遠の住拠はパリ郊外のロシア正教会の墓地にあった。ロシア人の司祭と，ポルトガル人の墓守に手厚く護られ，妻ヴェーラと共に葬られている。ロシア語とフランス語でその名を刻まれた墓碑は色とりどりの花で賑やいでいた。

先日，黒沢明の死が報ぜられたが，フランスのテレビはこれをトップニュースとして流した。彼の人気の，特にフランスに於ける高さを示すものであるが，私は在外研究中クロサワをドストエフスキー理解の第一人者とする評価を，高名なフランス人学者から，招待されたディナーの席で直接聞く機会があった。《Dostoevsky and the process of literary creation》(Cam-bridge University Press 1990) の著者であるソルボンヌ大学教授 Jacques Catteau 氏からである。「ドストエフスキーの『白痴』の映画化で最高の作品はクロサワのものです。彼ほどドストエフスキーを深く理解し，芸術的に表現した映画監督は世界中探したって他にはいませんからね…」

デザートに移ったとき，教授はもう一つの日本との縁を披露した。モスクワ・シェレメチエボ空港で手荷物を日本人のものと間違えられたというのである。フランス人姓〈Catteau〉は「加藤」の発音に近く，表記はキリル(ロシア) 文字では同じ〈KATO〉であるために起ったものであった。この姓は日本で最も多いものの一つであることを説明すると，彼は，「日本には私の親戚が沢山いるのですね。」と云って笑った。

一年間の在外研究期間が終ろうとしていた頃，この国のオペラを一度も観ていないことに気付き，手許にあった〈Pariscope〉の頁を急ぎめくってみた。意外にも，この週パリで上演されるオペラ，芝居はプーシキン，チェー

ホフといったロシア物が殆んどであった。結局，レニングラードからやってきたロシア・オペラを観て，芸術の都を後にすることになった。

〔おわりに，本学の在外研究制度から大きな恩恵をうけた一人として，市及び大学に対し，心からの謝意を表して，拙稿を閉じさせていただきたいと思います。〕